

初年度教育としての“地域づくり実習”の実践と課題

～実社会で必要な力をつけるための多面的授業プログラムづくり～

Trials and issues of “regional-development-practice” as First-Year experience

谷口 新一

TANIGUCHI Shinichi

1. はじめに

富山国際大学では、平成20年度より現代社会学部がスタートした。現代社会学部が目指す教育は「実務・実学重視型教育」であり、その教育を象徴するのが各種実習科目である。実習科目の中でも、学部共通科目として各専攻の共通必修科目として位置付けられているのが、今回私が実践した「地域づくり実習」である。また、富山国際大学では、新しいスタイルとして、アカデミックアドバイザー制度を設けるとともに、キャリアサポートを充実したカリキュラムを組んでいる。初年度教育の重要性が叫ばれ、本学でも初年度教育を重視したカリキュラムとなっている。さて、大学が目指すビジョンと社会から求められる力としては、文部科学省が提唱する「学士力」、経済産業省が提唱する「社会人基礎力」が挙げられる。また大学に求められる存在意義として地域への貢献があげられる。

私は、学生一人ひとりを大切にしたいという理念を核としつつも、大学が目指すことや社会に求められていることなど様々なセクターのニーズを勘案しつつ、どのように具現化していくかをビジョニングして、多面的に実習プログラムを組み立てた。実習であるがゆえ、社会経験の少ない1年生132名の必修授業であるがゆえ、様々な授業リスクマネジメントが必要であったが、初年度教育の英語訳が First-Year experience ということにもあるように、豊かな体験・感動体験を学生に経験してもらう場づくりをすることを拠りどころにして授業を進めた。本編では、私のこれまでの地域づくりの知恵と経験、ノウハウを元に作成した地域づくり実習プログラムの実践とその課題について述べたい。

2. 実習プログラム作成にあたり把握した社会環境および大学生像

2.1. 文部科学省中央教育審議会「学士力」

資料1は、文部科学省中央教育審議会「学士力」について、2008年12月24日に最終答申された内容である。(3. 態度・志向性については詳細に記載)

これまで本学のカリキュラムで網羅していなかったこととして、「チームワーク ,リーダーシップ」

が挙げられるのではないかと考える。また「自己管理能力」や「倫理感」「市民としての社会的責任」などが示されているが、実習という授業だからこそ向上できる学士力項目なのではないか。「学士力」を育むための重要な位置づけの授業という使命感のもと実習プログラムを策定した。

資料1 文部科学省中央教育審議会 学士課程教育の構築に向けて(答申)2008年12月24日

学士力～学士課程共通の学習成果に関する参考指針～

4分野13項目

1.知識・理解

専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解するとともに、その知識体系の意味と自己の存在を歴史・社会・自然と関連付けて理解する。

(1)多文化・異文化に関する知識の理解

(2)人類の文化、社会と自然に関する知識の理解

2.汎用的技能

知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能

(1)コミュニケーション・スキル

(2)数量的スキル

(3)情報リテラシー

(4)論理的思考力

(5)問題解決力

3.態度・志向性

(1)自己管理能力

自らを律して行動できる。

(2)チームワーク，リーダーシップ

他者と協調・協働して行動できる。また、他者に方向性を示し、目標の実現のために動員できる。

(3)倫理観

自己の良心と社会の規範やルールに従って行動できる。

(4)市民としての社会的責任

社会の一員としての意識を持ち、義務と権利を適正に行使しつつ、社会の発展のために積極的に関与できる。

(5)生涯学習力

卒業後も自律・自立して学習できる。

4.統合的な学習経験と創造的思考力

これまでに獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力

2.2.経済産業省「社会人基礎力」

経済産業省「社会人基礎力」では、3つの能力・12の要素を規定している(資料2)。これらは企業へのヒアリングなどを元に、実社会で求められる能力を系統化したものである。地域づくり

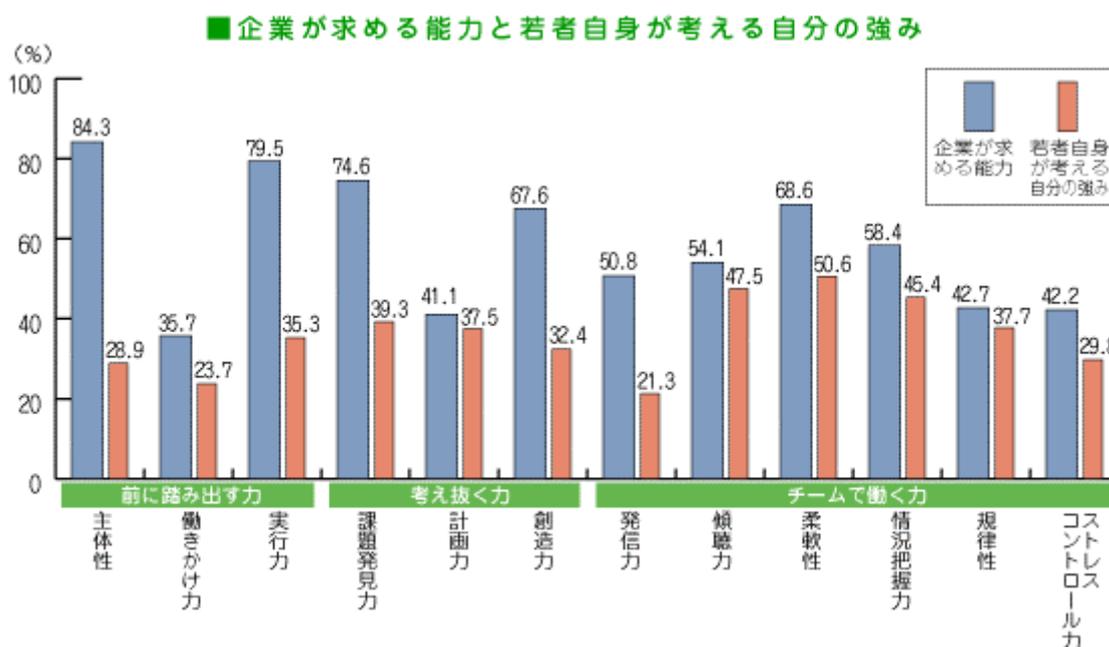
実習を遂行するためには、3つの能力・12の要素のすべてが求められる。また、学生に欠けている能力・要素があるとすれば、それを育む絶好のチャンスである。私は民間企業で17年間の勤務経験もある。実社会に求められているこれらの能力をいかに培うか、実習プログラム策定の羅針盤のような役割を果たした。

資料2 経済産業省「社会人基礎力」3つの能力・12の要素 平成19年5月17日公表

分類	能力要素	内容
前に踏み出す力 (アクション)	主体性	物事に進んで取り組む力
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力
	実行力	目的を設定し確実に行動する力
考え抜く力 (シンキング)	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力
	創造力	新しい価値を生み出す力
チームで働く力 (チームワーク)	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力
	状況把握力	自分と周囲の人々と物事との関係性を理解する力
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力

さて、資料3は、社会人基礎力として企業が求める能力と若者自身が考える自分の強みとの乖離を表したものである。

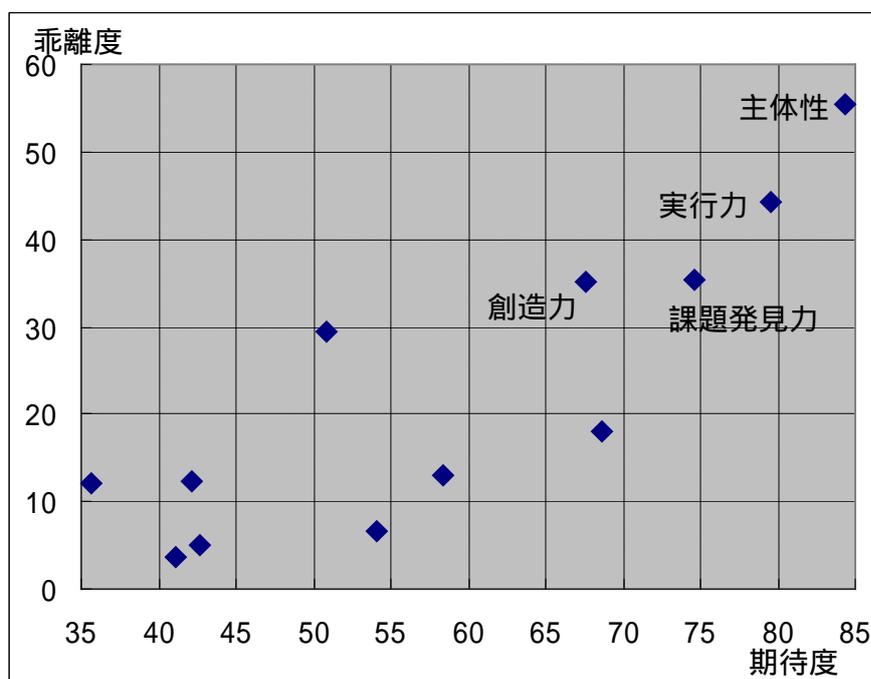
資料3



(出典) Benesse 教育研究開発センター「進路選択・キャリア教育」～第3回(2008年版)～

また、散布図1は、資料3を元に、期待度（企業が求める能力）を横軸とし、乖離度（企業が求める能力 - 若者自身が考える自分の強み）を縦軸として、筆者が作成したものである。

散布図1 筆者作成



企業からの期待度が高く、しかし、若者自身が身につけていないと自己認識している力は、「主体性」や「実行力」である。まさしく学士力にも通じ、大学が学生に対し行う教育として最も求められている能力項目が、この「主体性」や「実行力」であろう。本実習では、学生が「主体性」や「実行力」を向上させ、他の大学と差別化できる学生を育てる大きなチャンスであるという認識で実習プログラムを策定した。

また、次に乖離度が大きくかつ期待度が高いのが、「課題発見力」や「創造力」である。これらの力の養成について意識したのが、PBL (Problem/ Project Based Learning : 問題/課題立脚型学習。30年前にカナダで始められた。学習者に実際のプロジェクトや擬似的なプロジェクトを体験させることにより、課題解決の手法や能力を修得させる育成手法) である。大学時代に習得した知識がどのように社会で役に立つのか、疑問を抱く学生も多い。実習では、実社会という刺激的でリアリティあふれるいわば教材から、リアリティある問題や課題を発見し、それを解決していくプロセスを大切にして実習プログラムを組み立てた。初年次教育としては、PBLの授業はかなり高度といえるかもしれない。しかし、大学で学ぶ意味や意義を学生が見失いつつある現在、キャリア教育を1年次から行うことの意味と同様に、実習を1年次に行い、地域社会のリアリティにふれ、社会に参加することの楽しさを知ること重要であろう。社会にふれる実習を初年次に行うことは、他大学ではこれまであまりなされてこなかったかもしれないが、大きな教育的可能性のあるフロンティアの分野ではないかと考えている。

2.3 高校生の進路についての調査第4回 (2008年1月)

東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センターが実施した、高校生の進路についての

調査第4回(2008年1月)の第6問において、資料4のとおり、大学生の授業科目としての経験率と有用度が調べられている。

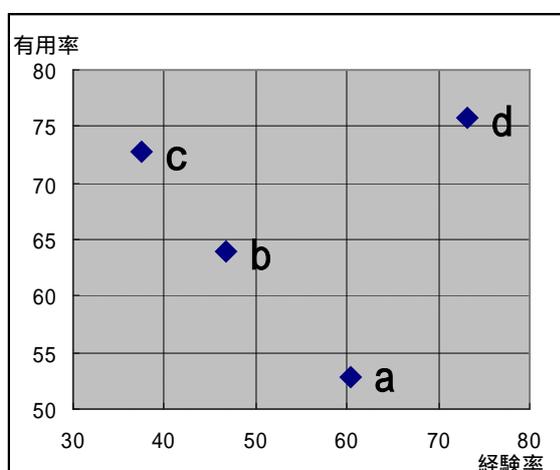
資料4

問6 大学に入ってから、次のような経験をしましたか。また、それは有用でしたか。a~dのそれぞれについてあてはまる番号1つに○をつけてください。

	経験した				経験していない
	有用ではない	どちらともいえない	有用	非常に有用	
(a~dそれぞれに○は1つずつ)					
a. 高校での未習科目を学ぶための補習的な科目	2.7	15.7	17.9	3.1	60.3
b. 大学での勉強の方法(スタディ・スキル)を学ぶ科目	2.2	16.9	28.5	5.5	46.8
c. 就職や将来のキャリアをテーマとした科目	1.6	15.3	32.8	12.7	37.5
d. インターンシップ(教育実習や工場実習を含む)	1.5	4.9	12.0	8.3	73.2

また、散布図2は、経験率を横軸とし、有用率(非常に有用または有用/経験率)を縦軸として、筆者が作成したものである。

散布図2 筆者作成



学生が感じる有用率が最も高いのがdのインターンシップであるが、ここ数年、急速にその環境が整いつつある。有用率が高くかつ経験率が低いのが、cの就職や将来のキャリアをテーマとした科目である。この結果からいえることは、キャリアをテーマにした科目を増やしていくということが学生へのニーズに答えることになるということである。本実習は、地域づくりをテーマにした実習であるが、就職や進路決定の一助にもなるように、大学4年間の学びの意識付けとなるキャリア教育的な要素も盛り込んで実習プログラムを策定した。

3. 授業のコンセプト設定

これらの社会環境などを背景に、授業のねらいとコンセプトを設定した。授業のねらいは3点。

地域の課題発見、主体的かかわり、チームワーク力向上、とした。

3.1. 地域の課題発見について

地域づくり実習は、単なる仕事体験やボランティア体験ではない。インターンシップなどの仕事

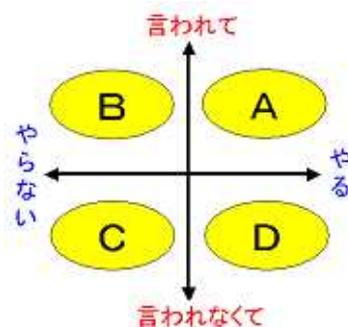
体験は、富山県では概ね大学3年次に組み込まれているが、地域づくり実習は、初年次に、しかもインターンシップよりも主体性や創造性でより高度な内容の授業を行うということでもあるという認識を持っている。初年次に地域づくり実習を行うことは、学生自身の社会経験の希薄さゆえ、かなりの困難性をそもそも伴っている。しかし、初年次に行う意味は、その困難性ゆえに逆に、学生にとっては大きな学び体験の場にもなりうると思う。また、学生の成長という面でも、他大学との差別化を図る戦略的な意味が込められていると考えている。初年次から地域に出て行き、地域のみなさんと交流しながら地域の課題を発見し、アクションプランを策定、実行することで、自己肯定感や社会への参加意欲、大学での学びの基礎が養われると思う。

3.2. 主体的なかかわりについて

地域（実習先など）との主体的なかかわりを促し担保するために、実習先との連絡や交渉などはすべて学生が担当することを宣言した。学生に任せることは実習先からのクレームなど多くのリスクを伴っており、1年生であるがゆえ特にそのリスクは高いが、だからといってそのリスクを犯さない限り、学生の主体性を引き出せないと考えた。右図は、

筆者が作成した主体性を育てるために心がけるべき概念図である。

右上のAの領域は「言われてやる」領域である。これは他者に反目しないという意味も含め、リスクの少ない行動パターンではあるが主体性とは言えない。右下のDの領域は「言われなくてもやる」領域である。まさに主体性という言葉でイメージされる領域であるが、他者からの指示やアドバイスがないということでリスクがあり、リスクをとらない生き方や他者と違うことをすればい



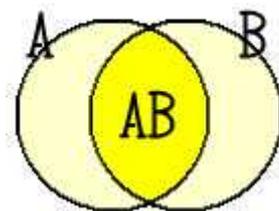
じめに会うなどのリスク管理型になれている現代の若者にとっては難しい行動領域である。Bの領域は「言われてもやらない」領域である。この領域は、他者に反目するという意味において、リスクの高い行動パターンではあるが、主体性を育む場づくりを行うためには、指導教員はあえてBの領域を積極的に認めていくことも重要であろう。Dの領域という主体性だけを教員が学生に求めるのでは片手落ちで、Bの領域も否定してはいけないと思う。実社会では、数々の食品偽装事件などを背景に、コンプライアンスの重要性への認識が深まっている。盲目的な従順さを積極的に否定していく姿勢が主体性を担保するものと考え。ただ、Bの領域はリスクが高いがゆえ、学生にも相当の覚悟が必要である。また、覚悟という意味ではDの領域も同様である。Aの領域をなるべく少なくする環境づくりのために、実習先とのやり取りは学生たち自らがいき、大学側から実習先への途中連絡はしなかった。教員は事故など緊急時の対応を除いては最初と最後のみフォローアップするという前提で実習先に理解をしてもらった。また、授業での学生間の主体的なかかわりや参加を促すために、情報を共有しながら実習を進めることにした。グループ班長や副班長を決めてグループ活動するいわば“情報ピラミッド型”ではなく“情報共有型”とした。ピラミッド型であれば、グループで1枚のワークシートを作成するなどすればいいかもしれないが、それでは情報が班長や副班長に偏ってしまう。偏りがあれば、他人任せとなったり固定化して、主体的な参加が望めないのではないかと考え、一見無駄とも思える情報共有型とした。これは、情報に集中と偏りがあることにより、病欠時など実習先に迷惑をかけないためのリスク管理のためでもある。

3.3. チームワーク力向上について

チームワーク力は「社会人基礎力」で提唱されている3つの能力のひとつである。しかし、大学のカリキュラムにおいて、特に文系の大学において、チームワーク力を育成する授業は少ないのが現状ではなかろうか。本学が初年次に必修として設けている「キャリアデザイン講座」は、キャリア教育として社会や仕事への糸口をつかむ有意義な授業となっているが、1対多という講義形式でありチームワーク力を伸ばすことはできない。本実習は、単なる実習ではなく、グループワークを基本としており、チームワーク力を伸ばす貴重な機会であるという認識も持っている。

3.4. その他

学生の主体性を引き出すために、実習先の希望選択を行った。誰かが決める、誰かに与えられるものではなく、学生自らが自己決定することを大切にしたいと考えた。学生の自己決定が主体性を担保し、発見や学びの基礎になるのではないかという思いからである。また、学生が地域から学ぶだけではなく、地域貢献や地域活性化にも寄与できればという思いから実習先を選定した。実習することで学生が学び成長でき、かつ、学生が活動することで実習先や地域にとってメリットがあり喜ばれるところ(右図参照・A B領域、A:学生の学びと成長、B:学生が活動することで喜ばれる)当たり前のことではあるが、幸せを積み重ね継続していく大切な視点である。また、今回は実習先にもまちづくりへの参加意識を持ってもらえたらという思いから、実習先選定ではテーマストーリーを持たせた。具体的には、本学の地元富山市上滝地区に集中的に実習先をお願いした。上滝地区のコミュニティとしての役割を再認識してもらう機会にすることで間接的に上滝地区を活性化したいということを含意している。また、次年度以降の実習計画の参考とするために、アンテナ的に富山市中心市街地での活動グループを選定した。



4. 実習の概要および年間計画

平成20年度の実習スケジュールは資料5のとおりである。

前期2コマ×14回、実習3日間、後期1コマ×3回

資料5

【前期】	
4月14日	授業の進め方などオリエンテーション プロフィール&自己紹介ヒント集の記入
4月21日	自分を発信&他者を知る(自己紹介) 1人1分×132人=132分
4月28日	グループ活動体験 課題「富山国際大学をよくするには？」(発表25グループ×3分)
5月12日	地域づくり屋台村(実習先候補提示) 終了後、学生が実習先希望調査書を提出(第1~第4候補まで)
5月19日	実習グループ分け発表、グループアイスブレイキング
5月26日	現場訪問準備(ヒアリングワークシートづくり&グループ紹介シート作成)
6月2日	現場訪問(実習日誌提出)
6月9日	訪問予備日(実習済グループは実習先資料づくり)
6月16日	各グループ毎、実習先資料づくり
6月23日	アクションプランづくり
6月30日	アクションプランづくり
7月7日	アクションプランの発表
7月14日	実習の心構え
7月25日	予備日
【実習本番】	夏休み期間中、アクションプランの実施(3日間)
【後期】	
9月29日	実施報告書づくり(各学生)
10月6日	発表準備(各グループ)
10月20日	地域づくり実習発表会 パワーポイントによる発表(4分×18グループ代表)

4.1. 実習前（前期授業）

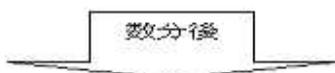
4月14日は、授業の進め方などオリエンテーションを行った。実習グループが決まるまで、出欠把握や学生間での相互認知のため、座席を指定した。実習では、学生と教員の信頼関係が重要であるという認識のもと、教員の人となりや伝わる自己紹介をした。また、次週の自分を発信＆他者を知る（自己紹介）の参考としてもらうべく、プロフィールシートと自己紹介ヒント集の記入を指示した（参考資料1・参考資料2）。プロフィールシートでは、車所有の有無を聞くことで、実習先までの交通手段の確保を教員が把握することでグループ形成の一助とした。また、部活やアルバイト状況、携帯電話所有の有無、実習にあたり教員に配慮してほしいことなども把握し、多様な学生に対応すべく、ひとりひとりの学生が置かれている状況を把握し、実習をスムーズに行うための情報を得た。また、学生への案内をすべてメールで管理すべく、学生のメールアドレス取得と研究用サーバーからの送信が可能かどうかの確認を自動化して行った（資料6）。具体的には、特にプログラミングをすることなく、chiiki@asoaso.jpというメールアドレス（QRコードを学生に示しよりユーザフレンドリーに）に学籍番号と氏名、携帯電話番号を送信。chiiki@asoaso.jpというメールアドレスには自動返信機能を持たせておいて、返信メッセージが届くことにより、携帯メールが着信拒否となっていないかを確認。また、学生にも担当教員のメールアドレスと携帯番号を確実に知らせるという意味を持たせている。

資料6

(1) chiiki@asoaso.jp



へ、学籍番号・氏名・携帯電話番号を記入して送信。



(2) 自動返信が届いた→教員に届いたか確認してもらいOK!

届かない→asoaso.jp ドメインからのメールが届くように携帯メールの設定変更!

4月21日は、グループを形成するために必要不可欠な自己紹介の時間とした。自分を発信し、他者を知るという時間である。4月28日は教員が無作為にグループ分けを行い、グループ体験活動の時間とした。このグループ体験活動の意味は、学生がグループ活動に慣れるという意味も含まれているが、本番のグループの形成に向け、教員側がノウハウを蓄積し、グルーピング時のリスクを回避する意味も持っている。今回の体験活動では、「富山国際大学をよくするには？」という全員に共通するテーマで模擬体験を行ったにも関わらず、初対面同士となる無作為グルーピングでは議論がうまくいかないグループが多数あった。友だち関係を基盤にしたグループ分けは弊害もあるだろうと認識しつつも、支えあいや主体的な参加を優先しようという結論が得られ、グループ分けの参考にするための貴重な機会となった。5月12日は、地域づくり屋台村と称し

た、実習先を決めるための情報提供の時間を作り、学生は実習先希望調査票（参考資料3）を提出した。実際に実習先からもプレゼンに来てもらうことで実習先もこの実習の主体者であるという気持ちを持ってもらう機会となったと考える。学生にとっては実習に対するリアリティを持つ機会になったと考える。屋台村では、活動日程や場所、実習で取り組んでほしい課題、活動条件などを事前に提示してもらうことで、実習先とのミスマッチを事前に極力回避すべく最善を尽くした。グループ分け決定後でのグループ変更を行った場合、本実習の目的であるチームワーク力の形成に大きな障害となるとともに、実習先にも迷惑をかけることになるからである。留学生については、日本人学生と留学生が交流する絶好の機会であるという考えから、なるべく各グループにばらばらとなるようにし、留学生の中で希望を聞いた。5月19日は、グループ分けの発表とその後一緒に活動するグループでのアイスブレイクの時間とした。アイスブレイクでは、ワークシート1（参考資料4）のとおり、グループメンバー情報を全員が共有することでグループ内での情報に偏りをなくし、相互に支えあう共同体であるという意識付けを行った。5月26日は、実習先の現場訪問準備として、ヒアリングシートづくり（参考資料7・参考資料8）とグループ紹介シートづくり（参考資料6）を行った。また、次週の訪問に向けた実習先とのアポとりを行った。グループ紹介シートには、グループメンバーの写真と氏名を入れたことが、実習先にとっての実習マネジメントの上で大きな効果があったようである。6月2日は、基本的には現場訪問の日とした。実習活動先でヒアリングを行い、これをメモし、その後実習活動先の印をもらうことなどで学生に緊張感を持たせることにした。グループが自発的に自律的に行動できるようにワークシートを工夫した（参考資料9）。その後、各グループが実習先との情報交換をしながら、アクションプランづくりを行った。7月7日はアクションプランの発表会を行った。完成したアクションプランについては、発表の前に、実習先からの承認を得るように指示し、教員が承認印を確認しリスク管理を行った。各グループが目標と期限を持ってプランづくりを行うとともに、他のグループの成果を知り、自分たちの到達度を確認しヒントを得る共有の機会とした。

4.2. 実習本番（夏休み中）

資料7は、最終的な実習活動先と人数である。実習は主に8月から9月の夏休み中に行った。14箇所18グループ（1グループ平均人数は7.3名、最大11名、最小4名）となった。

資料7

実習活動先	実習人数	女性 (内数)	留学生 (内数)	受入団体
フォルツァ総曲輪	9	4	2	株式会社まちづくりとやま
大山図書館	4	1	1	富山市立大山図書館
上滝小学校	5	5	1	富山市立上滝小学校
おわら風の盆	8	0	1	社会福祉法人フォーレスト八尾会
おらとこA	7	2	2	NPO法人おらとこ
おらとこB	6	4	1	NPO法人おらとこ
おらとこC	5	0	0	NPO法人おらとこ
あそあそA	11	3	0	あそあそ自然学校
あそあそC	7	3	1	あそあそ自然学校
ひだまりの家	6	0	1	大山福祉サークル・ひだまりの家
味彩おおやま	11	2	1	農事組合法人味彩おおやま
いいちゃ	11	5	1	NPO法人立山WAIいいちゃ
いいちゃB	5	0	0	NPO法人立山WAIいいちゃ
夢への架け橋	7	1	1	独自企画
映像メディア	4	1	1	富山国際大学映像メディア研究会
よってかれ家	10	4	1	大山商工会・街かどサロン
上滝保育園	7	0	1	社会福祉法人大山保育会
オープンキャンパス	9	5	1	富山国際大学企画課
計	132	40	17	

いいちゃBグループは、部活動日程の関係でやむを得ず当初の上滝小学校グループから5人を分離してグルーピングをした。また、ある学生は当初本人の希望もあり、夢への架け橋グループであったが、他のグループメンバーとの齟齬があり、特例として教員の判断で味彩おおやまグループに移動した。安易なグループ移籍を認めないのが原則であるが、認める場合も「活動先変更シート」(参考資料10)のすべてをクリアすることを求めた。変更の理由の確認、当初のグループメンバーの了解、旧活動先へのお詫び文書作成と訪問了解、新しい活動先への訪問了解など、おそらく高校まででは経験したことのない責任ある段取りを踏むよう指示した。また、実習直前になって、事情はあるものの予定していた日程で実習ができない事例も数件あった。この場合も、同様の手続きを指示した。何か変更するときは、関わる人すべての人の了解が必要であること、迷惑をかけないことなど、自律的な社会人への第一歩としての経験になったと考える。

4.3. 実習後(後期授業)

実習終了後の後期授業で、各学生個人のふりかえりやグループ毎のふりかえり、グループ間での共有のために、報告書の作成を個人毎に行うとともに、10月20日に全体発表会を行った。全体発表会では、パワーポイントを使うことを指示した。不慣れた学生もいたが、実習本番で培ったチームワークで、相互に楽しく学びながら作成していた。また、通常の授業アンケートとは別に、自己評価シート(参考資料11)により、学生自身が自分の学びを振り返った。右の写真は、全体発表会の様子。



5. 具体的な実習活動例と新聞記事

後尾参考事例のとおり。

6. 評価方法

実習の評価は、実習40点、出席状況40点、レポート20点の合計100点とした(右表)。実習の内訳は、教員評価を30点、実習先からのフィードバックシート(参考資料12)による評価点を10点とした。レポートについては、毎回の授業でのふりかえりシート(参考資料5)と実習後の各個人の実施報告書をそれぞれ10点として評価した。

点数評価		計100点
実習 40点	教員総合評価	30点
	実習先フィードバックシート	10点
出席状況 40点	出席状況	40点
レポート 20点	日々ふりかえりレポート	10点
	実習後実施報告書	10点

7. 効果と課題

7.1. 学生の自己評価から

資料9は、3分野23項目について、4段階で、学生自身に自己評価してもらった集計である。3分野とは、グループ活動全般について(上から15項目)、アクションプランについて(次の6項目)、今後について(最後の2項目)である。自己評価については、PDCAサイクルを回し、自分自身の活動を振り返り今後に活かすためのものであり、授業評価には使用しなかった。

自己評価を分析するために、(できた+まあまあできた)÷(あまりできなかった+できなかった)

という比率をランキングしたのが右の表である。「他の人の意見をきちんと聞くことができた」の自己評価が最も高い。受動的であるが大切なことであり、現代的な学生にとっては話を聞くということは問題なく身についている能力といえるであろう。「任された仕事について責任を持って確実にこなした」については、主体的などうかは別として責任感も高校時代までに培われているのであろう。

他の人の意見をきちんと聞くことができた。	1
任された仕事について責任を持って確実にこなした。	2
地域づくりに役立った。	3
全員で協力して活動することができた。	4
実習先とのつながりを大切にしていきたい。	5
中略	
グループで意見をたくさん出し合うことができた。	19
発表は工夫してわかりやすくてできた。	20
他の人の参加を促すようにつとめた。	21
グループ内での進行役を担当することができた。	22
実習先との連絡を担当することができた。	23

「地域づくりに役立った」については、担当教員としては未熟さを感じる場面が多かったが、やりがいを感じているという面では、この自己肯定感を積み重ねて積極的に活動していったほしい。「全員で協力して活動することができた」が4番目にランキングされていることについては、チームワーク力向上は授業の目的のひとつであり、教員として嬉しい限りである。「実習先とのつながりを大切にしていきたい」についても、直接的な目的ではないものの、授業だから仕方なく実習をこなしたという感覚ではなく、一回限りではない地域との継続的なつながりの気持ちを持ってもらえたのはとても嬉しい。地域の課題発見が目的のひとつであるが、課題を発見するためには、興味関心というまなざしを持ち続けていることが重要であり、これからの可能性を期待したい。逆に、「他の人の参加を促すようにつとめた」については、他者への働きかけが苦手である現代の学生像を表している。今後の大学生活の中で他者とのかかわりを深め、他者から学ぶことで自分を大きくしていったほしい。「発表は工夫してわかりやすくてできた」については、パソコンの技術的なものではなく、プレゼン能力や伝える力をもっと磨く必要がある。「グループで意見をたくさん出し合うことができた」が下位にランキングされていることについては、教員側も大いに自戒すべきかもしれないが、高校時代までの教育において、受動的であったり、出る杭にならない方が得というような限定合理的な行動パターンが身にしみついていることによるのかもしれない。主体性能力は小中高での教育では否定されがちなのかもしれない。アクションプランづくりでは創造的な部分の希薄さも見受けられたが、これもその証左であるともいえる。大学や社会では主体性が大事であり、主体的で創造的な人材づくりのためのプログラムづくりを次年度以降洗練させていきたい。

7.2. 実習学生の生の意見から

資料8は、実習後の後期授業中に行った学生アンケートからの抜粋である。実習の3つの目的について、満足度を示す意見が多かったのは、今回の実習プログラム構成がそれなりの完成度を示し、成果をあげたということであると考えられる。また、コミュニケーション面やキャリア教育面で

の肯定的な意見も多く見受けられたことは多面的で複眼的な授業構成の成果でもあると考える。

資料 8

【肯定的な意見】

地域への関心

- ・ 実習を通じて地域のことを知れてよかった。
- ・ 富山も少しはいいなと思えてきた。

主体性

- ・ 自分たちで活動内容を考え、実際に活動するという授業であり、自分も成長することができた。
- ・ また何かやりたい。
- ・ 何をすれば相手が喜んでくれるかを考えるのは大変だったが、できたときは嬉しかった。
- ・ できることがあるとき、自分から動けるようになった。
- ・ 積極的に取り組めるようになった。
- ・ 自分の意見を具体的に話せた。
- ・ 相手の話を聞いて、どうしたらよいのかしっかり考えて自分から進んで活動できた。

チームワークと協力

- ・ みんなで協力することができた。
- ・ 仲間と協力して物事を成し遂げることができた。
- ・ みんなと親しくなれた。
- ・ 人とのつながりを大切にできるようになった。

コミュニケーション面

- ・ グループの人や実習先の人たちと話しをして、人見知りが少なくなった。
- ・ 様々な年代の方と交流できたので事前よりも礼儀が良くなった。
- ・ 人とのコミュニケーションがよりとれるようになった。
- ・ 人の意見を聞くようになった。

キャリア教育面

- ・ 実習先の方から、社会に出て必要なことを教えてもらった。
- ・ 普段経験できないことができたのでとてもよい機会になった。
- ・ 働くということの大切さ、楽しさを学んだ。
- ・ 人と話すのが好きだと改めて実感した。

その他

- ・ 先生とも話しやすく活動もやりやすかった。
- ・ 素晴らしい思い出となった。
- ・ 物事をより深く追求できるようになった。
- ・ 段取りをつけて計画通りに動けるということがどれだけ大切で成功への王道であるかわかった。

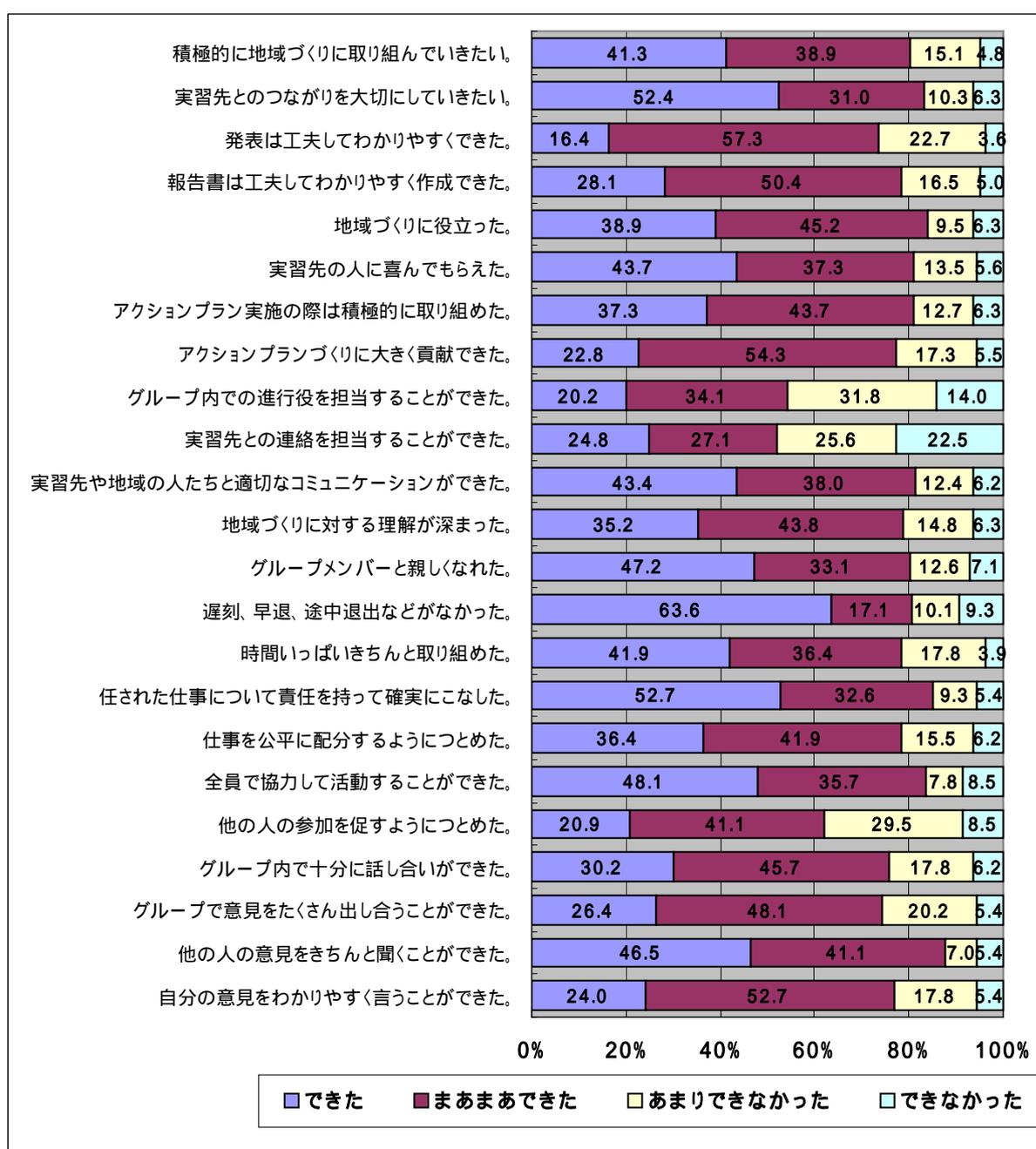
【否定的な意見】

- ・ 他の大学ではしていないことをしてほしくない。
- ・ 2時間連続はつらい。5限は部活動に影響する。

7.3. 実習先フィードバックシートから

実習先からは、実習人数が多いという指摘が数件あった。132名という大人数の実習であり、教員の授業マネジメントの関係からも実習先が増えると難しい面はあるが、実習先に喜んでもらうのが持続的な制度を作る意味でも重要であるので、次年度以降は1グループあたりの人数を少なくしたい。また、今回は、留学生をなるべく各グループにばらつかせることで、日本人学生との交流や留学生自身の日本語能力および日本社会理解の向上をねらいとしたが、日本語の習熟度の未熟さが原因で、日本人学生と相互に支えあうグループが少なかった。留学生の持ち味を積極的に活かし、主体的なグループワークに参加するために、留学生を同じグループにまとめることを次年度以降試行してみたい。

資料9



8.まとめ

学生から何のために大学で勉強するのかと問われることがある。私は社会に参加するために必要な経験をするのが大学4年間であると考えている。初年度教育の英語訳が First-Year experience であるということからもいえるように、大学1年次をさまざまな経験をする最初の年と位置づけるとシンプルなのではないだろうか。教員は、大学でどんな能力をつけるように指導するかではなく、多様で豊かな経験の場をどうやって作っていくか、という視座に立ち、その経験のコーディネート役となるということが肝要ではないだろうか。画一的な教育は学生の自己否定につながり、主体性を損なう。学生の学ぶモチベーションが低いとすれば、それは、卒業後に社会に参加するリアリティが学生の中でイメージされていないからではないだろうか。教員には、学生に社会に参加するリアリティを伝えるために、地域社会での経験の場のコーディネート役としての役割が今後ますます求められてくるのではないだろうか。

地域づくり実習の特徴のひとつに、グループワークが挙げられる。本学ではアカデミックアドバイザー制度といういわば担任制によるゼミできめ細かな学生サービスを行っているが、実習グループが大学内のコミュニティ（居場所や支えあい）のひとつとして機能することを想定して授業を組立てたということの特筆しておきたい。部活動やサークルなども大学内のコミュニティであるがより多面的なコミュニティが大学生活での豊かな経験のバックボーンになると考えたからである。

また、今回、地域教育力の大きさに改めて気付かされた。地域には学生を育てる大きな力が眠っている。地域のみなさんには多大なるご協力をいただいたわけであるが、教員側が学生と地域とのコーディネート役の力をさらにつけることで、学生の学びとともに、地域にももっと貢献ができるしかけができるに違いない。今後も学生を大きく成長させる地域に目を向けて活動していきたい。

私は、社会に参加する人づくりをしたいと考えている。社会に参加するための力は多種多様である。多種多様であるという意味は、すべての力を身につけるべきであるという意味ではない。受忍されるべき最低限の水準はあるかもしれないが、不足している力に目を向けて否定することから始めるのではなく、不足している力を認めつつも、一人ひとりの学生が持つ輝いている力にまず目を向けて肯定することから始めたい。企業が最も求める能力であり、かつ、学生が自信を持ってない能力である主体性。主体性は自己肯定感がベースに育まれていくものと考え。私は、一人ひとりの自己肯定感が主体性を育み、主体的に社会に参加、社会に参加することで、一人ひとりが成長するとともに、地域社会や日本が次の世代へと引き継がれていくものと考え。

私は、一人ひとりの学生が自己肯定感を持てるような教育活動をしていきたい。

謝辞

今回の実習における簡易備品購入など、財団法人富山第一銀行奨学財団からの資金により実施することができた。お礼申し上げます。また、本実習の非常勤講師である定村誠氏からは授業構成や実習先訪問など多大なるご指導とご協力をいただいた。感謝申し上げます。

【参考文献および参考ホームページ】

資料 1

文部科学省「学士課程教育の構築に向けて」中央教育審議会平成 20 年 12 月 24 日答申

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm

資料 2

経済産業省「社会人基礎力」育成のススメ 平成 19 年 5 月 17 日公表

<http://www.meti.go.jp/press/20070517001/kisoryoku-reference.pdf>

資料 3

Benesse 教育研究開発センター「進路選択・キャリア教育」～第 3 回（2008 年版）～

<http://benesse.jp/berd/data/dataclip/clip0011/index3.html>

資料 4

東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター

高校生の進路についての調査第 4 回（2008 年 1 月）

http://daikei.p.u-tokyo.ac.jp/index.php?plugin=attach&refer=High%20School%20Graduate%20Survey&openfile=HSGS4th_gt.pdf

参考資料 ワークシート等

参考資料1．プロフィールシート

プロフィールシート

個人情報は、教員が適正に管理し、第三者には漏洩しません。

学籍番号 2019XXXX 氏名 _____ 生年山月日 期・平 年 月 日 性 _____

(ふりがな) _____

氏 名 _____ 男・女 _____

現住所 _____ 重信郡 石 町 _____

大学までの交通手段 (複数) _____ 企画 _____ 月甲 _____ へ変更予定

携帯TEL _____ (自宅実家TEL) _____

携帯メールアドレス _____

パソコンメールアドレス _____

出身地 _____ 出身高校・学科 _____

専攻希望: 観光・ 観光デザイン・ 経営情報 _____

健康状態 _____

本実習にあまり興味は配慮してほしいこと: _____

大学での部活動やサークルは? (今後の予定も含む) _____

大学でやってみたいことは? _____

アルバイトは? (今後の予定も含む) _____



参考資料2．自己紹介ヒント集

学籍番号 2019XXXX 氏名 _____

自己紹介ヒント集

特技・自出PR・持っている資格: _____

興味関心のあること: _____

将来の夢・なりたい職業や職種: _____

性格を一言でいりよ? _____

中学校での部活動	好きな芸能人やアーティストは?
高校での部活動	好きな食べ物は何?
小学校での習い事	嫌いな食べ物は何?
中学校での習い事	好きな色は何?
高校での習い事	好きな動物は何?
今一番ほしいものは何?	好きな言葉は何?
今一番行きたい場所は?	マイブームは何?

※なるべく多く、詳しく書いてください。 つるひが啓

参考資料5 . 日々ふりかえりシート

学籍番号:	氏名:	所属先:
富山国際大学 地域づくり実習 ふりかえりシート(その1)		
5月19日	班の活動内容 自分の担当した活動の内容	印
感想		
5月26日	班の活動内容 自分の担当した活動の内容	印
感想		
6月2日	班の活動内容 自分の担当した活動の内容	印
感想		
8月9日	班の活動内容 自分の担当した活動の内容	印
感想		

参考資料6 . グループ紹介シート 例

いいちや



上の列・左から

1. [Redacted]
2. [Redacted]
3. [Redacted]
4. [Redacted]
5. [Redacted]
6. [Redacted]
7. [Redacted]
8. [Redacted]
9. [Redacted]
10. [Redacted]

ろしくお願ひします。
 ばります！
 何れに活かせるように精一杯頑張りたいと思ひます。
 一生懸命頑張ります。
 一生懸命がんばります。
 がんばります。

5
 : お祭りを楽しくなるようにがんばります。
 一生懸命頑張るので、よろしくお願ひします。
 : 楽しい日々になるように頑張ります。
 頑張ります
 充実した三日間になるように頑張りたいです。

2. 11. 4

参考資料 1 1 . 自己評価表

教員
確認
印

富山国際大学 地域づくり実習 自己評価表

学号: _____ 氏名: _____

実習先名: _____

以下の各項目について、半段階で自己評価してください。
1: できた 2: まあまあできた 3: あまりできなかった 4: できなかった

<<グループ活動全般について自分自身を評価してください>>

・ 自分の意見をわかりやすく言うことができた。	1	2	3	4
・ 他の人の意見をきちんと聞くことができた。	1	2	3	4
・ グループで意見をたくさん出し合うことができた。	1	2	3	4
・ グループ内で十分に話し合いができた。	1	2	3	4
・ 他の人の参加を促すようにつとめた。	1	2	3	4
・ 全員で協力して活動することができた。	1	2	3	4
・ 仕事を公平に配分するようにつとめた。	1	2	3	4
・ 任せられた仕事について責任を持って確実にこなした。	1	2	3	4
・ 時間いっぱいまでいそいそと取り組めた。	1	2	3	4
・ 遅刻、早退、途中退席などがなかった。	1	2	3	4
・ グループメンバーと関わり合った。	1	2	3	4
・ 地域づくりに対する理解が深まった。	1	2	3	4
・ 実習先や地域の人たちと適切なコミュニケーションができた。	1	2	3	4
・ 実習先との連絡を断当することができた。	1	2	3	4
・ グループ内での進行役を断当することができた。	1	2	3	4

<<アクションプランについて自分自身を評価してください>>

・ アクションプランづくりが大きく貢献できた。	1	2	3	4
・ アクションプラン実施の際は積極的に取り組めた。	1	2	3	4
・ 実習先の人に喜んでもらった。	1	2	3	4
・ 地域づくりに役立った。	1	2	3	4
・ 実習先は工夫してわかりやすく作成できた。	1	2	3	4
・ 発表は工夫してわかりやすくできた。	1	2	3	4

<<今後について自分自身を評価してください>>

・ 実習先とのつながりをも大切にしていきたい。	1	2	3	4
・ 積極的に地域づくりに取り組みたい。	1	2	3	4

その他、地域づくり実習で達成した・成長したと思うことがあれば具体的に記入してください。

参考資料 1 2 . 実習先フィードバックシート

富山国際大学 地域づくり実習 フィードバックシート (実習先→富山国際大学・担当: 谷口)

このたびは、富山国際大学地域づくり実習にご協力いただき、ありがとうございました。
今後この実習をより充実のものにするため、以下の質問にお答えください。忌憚のないご意見を
お待ちしております。 感謝状了後、速やかに送達いただけるようお願いいたします。

実習先名: _____ 実習日程: _____

担当者(記入者) 氏名: _____

1から5までについては、「はい」以外に具体的に記入してください。

1. 人数は適切でしたか。	・ はい ・ その他 ()
2. 時期や期間は適切でしたか。	・ はい ・ その他 ()
3. 学生は約束した時期・時間を守っていましたか。	・ はい ・ その他 ()
4. グループ内で協力して取り組んでいましたか。	・ はい ・ その他 ()
5. アクションプランは適切でしたか。	・ はい ・ その他 ()
6. 学生に不足していたことは何ですか。	
7. 教員側の配慮として不足していたことは何ですか。	
8. 指導すべき学生について (学生評価)	高く評価する学生名 (複数可) 劣しくない学生名 (複数可)

【来年度のご意向】 いずれか1つに○をつけてください。
1. 来年も歓迎 2. 来年は難しい 3. 検討する
来年度の実習生受け入れなどがあればお書きください。

その他、地域づくり実習に対する感想・改善が・感想などをお書きください。

富山国際大学実習係 課長 谷口 浩二
ご記入、ありがとうございます。

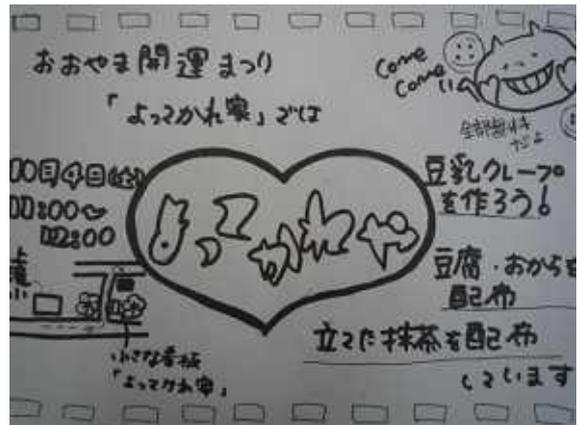
参考事例 実習活動例と新聞記事

実習活動例（よってかれ家）

よってかれ家は、男性6名女性4名計10名が活動した。よってかれ家は富山市上滝地区にある地域活性化をねらいとしたコミュニティスペースで大山商工会も支援している。手作りの豆腐が人気でところてん、小物や絵が売られている。今回の実習の課題は、3点。

毎年上滝地区で開かれてる開運祭にくる子どもが少ない、開運祭で出るメニューが毎年同じ、知名度が低い。これらの課題に対し、上滝小学校への告知(右資料)豆腐やおからを使った新メニュー(地元特産のみょうがを使ったみょうが味噌やっこ、梅わさびやっこ)の試作と販売を行った。小学生も多く訪れ、新メニューも好評で、よってかれ家のスタッフのみなさんや来場した地域のみなさんから喜ばれるなど大きな成果をあげた。

以下、活動の様子。



以下、新聞記事（北日本新聞・平成20年10月5日）



以下、よってかれ家グループの実習後発表資料

地域づくり実習発表
プレゼンテーション

よってかれ家

1
09

解決策

- 子どもたちがたくさん来てくれるように宣伝する。
- よってかれ家で作られている豆腐やおからで新メニューを作る
- これらを生かして今後の開運祭へつなげていくようにする。

4
21

子どもたちが楽しそう

- 私達の提案した、料理が思っていた以上に好評だった。
- 子どもたちがたくさん喜んでくれて祭りがにぎやかになった。

7
01:02

よってかれ家グループ

- よってかれ家は、上滝地区にある喫茶店です。
- 地域活性化をねらいとしています。
- 手作りの豆腐やところてん、小物や絵が売られています。

2
35

夏祭り準備の経過

- 9/11
開運祭で出すメニューを話し合いました。
- 9/18
実際にメニューを作って試食。
- 9/24
試食品の中から祭に出す料理を決めた。

5
02:45

準備の経過

- 幅広い年代の人を満足させることは難しい。
- 積極的に協力することにより、相手に早い印象を与え、その後のコミュニケーションもスムーズに行うことができます。
- 相手方やグループ内で十分に話し合いができて、予想外の出来事もなくスムーズに準備が進められ、グループでの作業をするときは各個人の得意の持ち場からメンバーが欠けたと驚かしました。

8
02:06

よってかれ家の開運祭

よってかれ家に訪問をして施設の話を聞いた
たり、実習内容についての話し合いをした。

→

- 毎年上滝地区で開催される開運祭に
くる子どもが少くない
- 開運祭で出るメニューが毎年同じ
- 知名度が低い

→

3
01:32

開運祭準備、開運祭当日

10/3
宣伝のために上滝小学校周辺にチラシ配り
よってかれ家で料理の下準備
最終確認

10/4 開運祭当日
am9:00~3:00
各自自分の担当に分かれ、作業。

6
02:27

終わり

9
01:15

